

## 「ジェンダーと学校教育」研究の視角転換 —— ポスト構造主義的展開へ ——

西條容子（お茶の水女子大学大学院）

### 1. 問題の所在

「性と教育」あるいは「ジェンダーと教育」研究は、教育の中に女子を可視化し、教育機会の拡大に大きく寄与してきた。しかし、何故女子が「女子」に男子が「男子」になっていくのか、という問題は不問にされてきた。というよりもむしろ当然視されてきた。人々の生活や価値観が多様化していると言われる現代社会にあって、なぜ、相も変わらず人々の殆どが、その（二者択一の）性別の者となることに、疑問が持たれないのか。本発表は、領域を「ジェンダーと学校教育」研究に絞り、第一に、その疑問が研究者の間で生じない理由を探ること、そして第二に、そういった疑問を提示出来る研究のあり方を探ること、を目的とする。

### 2. 精緻化するべき点

結論を先に述べれば、「女子というセックスが女子というジェンダーを担う」ことを自明視するというバイアスが、研究視角にかかっていることに難点がある。

このバイアスのために、多くのジェンダー研究が、社会的構築物であると結論付けたいデータを蒐集し、それを二つに分類・一般化し、その片方を女性性もう片方を男性性と名付けて、生物学的な女性／男性がそれぞれ女性性／男性性を担う、と直接結び付けてしまう。しかし、このような研究結果は、ジェンダーの生成過程をただ繰り返しているに過ぎない。このことは、近年の歴史学や社会学で得られている知見から考察することができる。

ジェンダーは、静態的に存在する性別ではない。ジェンダーは、セックスを産出する差異化実践であり、動態的にしか捉えられないものである。研究すべきは、そこに既にあるものとしての「セックスではない、ジェンダーという性別」なのではなく、日常の相互作用の過程の中の、セックスを産出してそれを基盤にした秩序を構成する、ジェンダーという差異化実践を可視化することである。差異化の「過程」を研究対象とすべきなのである。

上記のバイアスを認識し、かつ、差異化実践としてのジェンダーを研究対象とするよう方向転換をするために、当該領域の議論を精緻化していかなければならない。次の三点を論じよう。第一に、二分法的な性別カテゴリーを自明視して人々を二つに分類一般化してしまうことをやめる必要がある。第二に、ジェンダーがある人の所有物であるように捉えることをやめる必

要がある。そして第三に、ジェンダーの関係が権力的な非対称性をもつことを、忘れてはならない。差異化という実践は常に、境界線を定めることによって、分割したものの間に権力関係を構成する（上野1995）のであるから。

### 2-1. 二分法的な性別カテゴリーを自明視することの問題性

性別カテゴリーを自明視（あるいは絶対視）することについては、R.W.コンネル(Connell 訳書 1993)のカテゴリー理論批判がある。「ジェンダーと教育」研究で、1980年代終わりから研究視野に入ってきた「（女性）内分化」研究は、コンネルの指摘における「カテゴリー内分化無視」の問題に取り組むものとして位置づけることが出来る。しかしながら、「女性」というカテゴリーでの括りは暫定的なものである、といった視点があったとは言い難い。むしろ、人々が「男性」「女性」に二分しているもの、と自明視され、そのことが前提とされていた。

これに対して、コンネルの指摘は、単に性内の多様性を描きだしたり、分化要因を探る作業を導き出すものではない。カテゴリー理論批判の醍醐味は、むしろ、研究者が研究枠組みに用いるカテゴリーが、極めて政治的なものであることを指摘している点にある。性別カテゴリーは、説明概念ではなく、記述概念である。研究枠組みとして性別カテゴリーを自明視して用いること、つまり、性別カテゴリーが現実を反映した不変の枠組みであるという考えは、避けなければならない。

### 2-2. 近代性を自明視することの問題性

「二重規範(double standard)」という概念を思いおこしてみたい。落合(1990)によれば、この概念はつまり、究極的には諸「人間」間の平等を謳う規範を「平等主義規範」、ある社会的カテゴリーを一括して、平等であるべき「人間」から除外することを正当化する規範を「差別化規範」としたとき、その二つの規範が併存している様を言う。ある社会に構造的な「差別」は、「平等主義規範」と「差別化規範」の齟齬、すなわち「二重規範」状態によって存立するという。この「二重規範」に自覚的であらねば、極めて近代的な差別を、近代に飼い馴らされた形で、追い求めることになる。ジェンダー関係に焦点を絞る場合も、「人間」とされる存在とそうでないものの間に差異が形成され、その差異を基に秩序が形成されるメカニズムを解説す

るべきなのである。つまり、ジェンダー研究においては、「女」と「男」の差異を発見し、その存在を根拠にその差異の消去を求める議論を行っていくことが、かえって「二重規範」に支えられた近代的差別を強固にしてしまう可能性を秘めていることに自覚的であらねばならない。そして、そういった差異を根拠にした営みこそが、「近代化」という名の衣を纏っていることも認識し、自省していかなければならない。

「ジェンダーと学校教育」研究においても同じことが言える。近代的な平等の指標として教育達成や職業達成を用いることの危険性を認識していること、つまり「平等主義規範」に自覚的であることが、必要である。教育達成が「人間」の指標になっていること自体を、常に問い直している必要がある。近代的な機関である学校でのジェンダー関係を問題にする場合、「教育達成」という指標をも相対化して扱うのでなければ、近代的差別のあり方を見抜くことは出来まい。

なお、この自明視されている「近代性」を自省するという視点は、解釈的アプローチと共有するものである(稲垣1990)。目前の人々の相互作用過程を観察分析するには、解釈的アプローチが適しているだろう。「ジェンダーと教育」研究にも、解釈的アプローチは森(1985)によって既に導入されている。しかしながら、後続の研究は数少ない。

### 2-3. 内面化モデルを用いることの問題性

「性役割の社会化」あるいはジェンダーの「社会化」というアプローチの問題性を指摘しよう。ジェンダーは差異化過程であることから、その過程はその時々で多様である。多様であることを徹底して考えれば、同一人物が常に同様のジェンダーを繰り広げているとも、また、そこで同じカテゴリー(女や男)に括られる内容が常に同様のものであるとも、確証できないことに気付く。個人のアイデンティティ(女である、男である、という性自認)と言われるものも、カテゴリーに括られる内容やイメージも共に、常に変化しているのであり、一貫している保証は何もない。それが一貫しているかのように思われているのは、むしろ、個人のアイデンティティもカテゴリーに付加されるイメージも不変であるかのように見せるために、常に何らかの力が加わっていると考えべきである。個人のアイデンティティやジェンダーの普遍性、カテゴリーに括られる内容やイメージの一貫性は、幻想である。ここで、ジェンダー分析とは、ジェンダーという営みが生じる様を探究することである。研究者は、それが生じる状況・過程を、どのイメージがどのような状況・過程の

中で現れるか、あるいは使われるか、という視点で見つめる必要がある。

### 3. フェミニストポスト構造主義(Feminist PostStructuralism)

以上のような議論を踏まえた、ジェンダーを差異化過程であると捉えた「ジェンダーと学校教育」研究を進めて行く上で、フェミニストポスト構造主義(以下、FPS)の有効が有効である。FPSは、C.Weedon(1987)によって提唱された理論であり、フェミニストによる学校研究の最先端として位置づけられている。FPSの理論や、この立場の幾つかの経験的研究から、「ジェンダーと学校教育」研究にFPSを導入し、学校における人々の相互作用過程を詳細に分析していくことの重要性和有効性を主張することが出来る。

(大会当日、より詳しく議論はレジュメに付録する)

### 4. 学校の中のジェンダー形成

大会当日の発表では、以上の立場に立ち、日本における「ジェンダーと学校教育」研究の可能性を、具体的なデータを用いて、試験的にではあるが、提示しよう。

次のことを理解して頂けるであろう。つまり、「学校の中のジェンダー形成」研究とは、学校におけるジェンダー形成の過程を詳細に観察・分析して、そこできかなる差異化実践が行われ、どのように意味体系が構成されているか、を描きだしていくことを通じて、学校教育現象と性別カテゴリーとの関連を読み解いていく研究である、と。

(参考文献)

- Connell, R.W. 1987, 『ジェンダーと権力—セクシュアリティの社会学—』森重雄・菊地栄治・加藤隆雄・越智康詞訳, 三交社, 1993。
- 稲垣恭子 1990, 「教育社会学における解釈的アプローチの新たな可能性—教育的言説と権力の分析に向けて—」『教育社会学研究』第47集, 66頁—75頁。
- 森繁男 1985, 「学校における性役割研究と解釈的アプローチ」『京都大学教育学部紀要』第31巻, 218頁—228頁。
- 落合恵美子 1985, 「〈近代家族〉の誕生と終焉」『現代思想』13-6。
- 上野千鶴子 1995, 「差異の政治学」『岩波講座・現代社会学11・ジェンダーの社会学』岩波書店, 1頁—26頁。
- Weedon, Chris 1987, 'Principles of Poststructuralism' from *Feminist Practice and Poststructuralist Theory*, Basil Blackwell, pp.12-42.